

# 障がい者スポーツ体験の効果と課題

吉山 明里 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 中道 莉央

キーワード：障がい者スポーツ，体験，障がい理解

## 1. 緒言

2020年のオリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決まり、障がい者スポーツは近年飛躍的な発展を遂げている。これを契機として、これからの時代を担う人材に、障がいの有無にとらわれず多様な他者を一人の人間として尊重し合う「共生社会」に向けた態度を養うことが求められている。

そこで本研究では、大学生・小学生が障がい者スポーツの体験を通じてどのようなことを感じるのか等、障がい理解の効果と課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

B大学の46名の大学生と大阪府立E小学校の5学年2クラス計37名を対象に、ボッチャの体験プログラム(大学90分×1回、小学校45分×1回)を行った。指導は本研究者が行い、障がい当事者(ボッチャ選手)の紹介は競技大会の映像紹介にとどめた。体験前後の意識の変化について、18問からなるアンケートを2017年10～11月に実施した。

## 3. 結果と考察

紙幅の関係で、小学生の結果のみを述べる。

表1 体験プログラム前後の変化(小学生)

	事前	事後	有意差
不自由で大変か	3.64±0.51	3.27±0.99	**
手助けが必要か	3.54±0.53	3.19±1.15	*

(\*\*: $p<0.01$ , \*: $p<0.05$ )

「障がいのある人は体が不自由で大変だと思いますか」という問いに対し、体験前は不自由で大変そうだと感じていたが、体験後にはこれが低下していた( $p=0.01$ )。障がいを有しながらスポーツを行っている人の姿を見たり、自ら体験することで、同じ人間だという認識に変化

したのではないかと考えられる。これを裏づけるように、「障がい者とはちがうと思っていたけど違うって思ったら失礼だと思った」の自由記述も見られた。

「障がいのある人にはお手伝いをして、助けてあげないと思いますか」という問いに対しては、体験前はお手伝いをして助けてあげないといけないと感じていたが、体験後にはこれが低下した( $p=0.05$ )。「難しくて一部の人しかできないと思っていたが、誰でも楽しめるのがわかった」の自由記述のように、ルールや用具を工夫すれば自分たちと同じようにスポーツができることを知ることで、障がいのある人は助けてあげないといけない可哀想な人という認識が薄れた結果ではないかと考えられた。

## 4. まとめ

本研究の成果として、障がい者スポーツ体験により、障がい者と健常者の境界線のゆらぎが起り、障がいのある人は自分とは違う同じ人間だという考えに変化する等、障がい理解が促進された姿が確認できた。これが一時的なものだけでなく、「共生社会」に向け継続することができるように、経年的な計画で授業の中に取り入れる必要がある。その際には、ただスポーツを楽しむだけでなく、体験での意識変容が実生活での行動変容につながるように、体験プログラム前後に障がい理解についての学習を行うことが望ましいといえる。

## 主な引用・参考文献

- 中田千穂 (2013) 小学生の障がい者観の変容：車いすバスケットボール体験をもとに。日本体育学会大会予稿集, 64:399.  
安井友康 (2004) 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響。障害者スポーツ科学, 2(1):25-30.